

恋人でつなぐ街角 恋人のまち、気仙沼 「恋人発祥の地」高校生らPR

春と秋、どちらが好きかと聞かれれば、ここ気仙沼では私は絶対に春がいいです。今回は年甲斐もなく、「恋人」について書きます。

「気仙沼を「恋人発祥の地」として売り込もうと、地区の高校生らが新たなプロジェクトに取り組んでいる。近代短歌史上初めて「恋人」という言葉を使った国文学者で歌人の落合直文（1861～1903年）が同市出身であることにちなんだ。市内のデートスポットを紹介するリーフレットを作成し「恋人のまち、気仙沼」のPRに奔走している。

活動しているのは、市内の高校に通う男女21人でつくる「底上げユース」のメンバー。震災後に市内でボランティア活動を続けるNPO法人「底上げ」が呼び掛け、2012年9月に結成した。

市内には、竜宮の乙姫様が流れ着いた伝説が残る龍舞崎（たつまいざき）や源義経に思いを寄せた皆鶴姫（みなづるひめ）が漂着したとされる一景島などがある。今後も約3カ月ごとにリーフレットを発行し、あまり知られていないデートスポットを紹介する。

自宅を津波で流された鈴木紗也香さん（16）＝気仙沼高校2年＝は「震災後は全国の方々から心配されるようなまちになったが、もう大丈夫。これからは恋人のまちとして有名にしたい」と意気込む。（「河北新報」2013年8月26日付）

砂の上に わが恋人の名をかけば 波のよせきて かげもとどめず （落合直文）

この短歌は、絶対に失恋の歌です。（私の体験からして）

「森は海の恋人」の誕生とこれまで 豊かな天然の良港 ～気仙沼～

「気仙沼湾は三陸リアス式海岸の中央に位置する波静かな天然の良港です。古くから近海、遠洋漁業の基地として有名です。特にカツオの水揚げは16年間日本一を誇っています。気仙沼湾の波静かな入り江は養殖漁場としても優れていて、江戸時代からノリ、大正時代からはカキ、近頃はワカメやホタテの養殖も盛んです。

自然環境の汚染と影響

カキの漁場は世界中、川が海に注ぐ気水域に形成されています。川が運ぶ森の養分がカキの餌となる植物プランクトンを育てているからです。そこで、海の人々は、川の流域に暮らす人々と、価値観を共有しなければ、きれいな海は帰ってこない事を悟りました。

大川上流の室根山に自然界の母である落葉広葉樹の森を創ろう。そこで集まった仲間

で「牡蠣の森を慕う会」が作られたのです。

大川中流域に暮らす歌人の熊谷龍子さんとの出会いにより、「森は海の恋人」という表題も生まれました。こうして、平成元年から植樹祭が続けられ、これまで約3万本の落葉広葉樹の植樹が行われました。

未来へ向けて

東日本大震災以降地域の状況は一変しました。巨大津波の直後、生き物は消え、海は死んだものと皆が思いました。しかし今、多くの生き物たちが大変な勢いで戻り始めています。こうした生き物の力強さと、全国の皆さまからのご支援に支えられ、NPO 法人森は海の恋人は事業を再開することができました。」(NPO 法人森は海の恋人 HP)

ここまで書いてきて、私はハタと思いました。自分は「恋人」とは全く無関係だということが。何が「恋のまち、気仙沼」だ。それがどうした。勝手にやってくれ？！

【JR 気仙沼線「南気仙沼駅」前に立つ、落合直文の歌碑。漁師達で賑わった気仙沼一の繁華街、南気仙沼地区は、現在は廃墟のままです】

